

夢と夢の間

後藤明生

集英社版

夢と夢の間

一九七八年一月二八日第一刷印刷
一九七八年二月二日第二刷発行

著 者 後藤明生

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二〇五〇 郵便番号 一〇〇
電話 東京 三〇〇六三六一 (出版部) 二三〇六二七一 (販売部)

印刷所 中央精版印刷株式会社

株式会社美松堂印刷所

定 価 一 一 〇 〇 円

©1978 Meisei Goto, Printed in Japan

著者との了解により検印は随止します

乱丁・落丁本等はお取り替えます 0093-772122-90

目次

第一章	ゆく春や	五
第二章	同窓会	三
第三章	忘れ草	三
第四章	学生たち	六
第五章	賭け事嫌い	一六
第六章	新旧問答	二七
第七章	夏草や	二四
第八章	月は東に	三〇

夢と夢の間

第一章 ゆく春や

山川次郎は私立大学の講師である。週に四日、電車に乗って東京の大学へ出かける。教えているのはロシア語である。その他に、ときどき翻訳をしている。これが、彼の職業だった。

ご存知の通り、東京には私立大学がゴマンとある。大中小、古いの新しいの、色とりどりである。だから、ただ私立大学というだけでは、もちろん雲を掴むような話だ。読者にしても、山川次郎なる人物が、いったいどんな私立大学の講師であるのか、もう少しはっきり知りたいであろう。当然の話だ。しかし、何々大学と名前をはっきり出すわけにはゆかない。世の中には、まことにさまざまな人間がいて、小説に書かれたことは、何でもかんでも自分のことのように思い込んでしまう人がいる。

もちろん、この小説の読者に限って、そういう人はいないだろうと思うけれども、しかし念には念を入れ、である。それに、物事は何によらず、一から十まですべてをはっきりさせない方が面白いということもある。また、じっさいこの世の中には、すべてわかっているようで、いざとなると

はつきりしない、といった事柄が案外と多い。いちいち例を挙げるまでもなく、毎日の新聞を見れば、実例は幾らでも出ている。はつきりしないのは、何も山川次郎の大学だけではないのである。

そういうわけで、山川次郎講師の行き先ははつきりしないが、彼が電車を降りる駅はわかっている。家を出た山川は、最寄りの私鉄電車駅から乗車して、十分ばかり乗る。そこで国電に乗り換えて約四十分、御茶ノ水駅で降りる。そして、ニコライ堂のタマネギ形の屋根を左手に見ながら、ゆるい坂を下って行くのである。

しかし、いまは春休みだった。山川は講師であるから、入学試験の雑務もない。それでは暇かという、決してそうではなかった。翻訳である。これは彼の大切な副収入だった。なにしろ彼には三人の扶養家族がある。妻と、中学三年になる長男、小学校五年になる長女。

ただし、今度の翻訳は、彼にとって単なる副収入以上のものだった。ゴーゴリの『外套』である。実は彼は、『外套』のような小説を自分で書きたいと思っていた。学生時代から、それが念願であり、夢だったのである。しかし、山川次郎は小説家にはなれなかった。彼はその夢を、『外套』の翻訳に託したのである。

それからもう一つは、春の選抜高校野球だった。これがはじまると、彼はテレビの前から動けなくなった。もちろん、高校野球とゴーゴリとは何の関係もない。ただ、当然の結果として、その分だけ翻訳の方は遅れた。

ある日、夕食の席で、テレビに写った花見を見て、山川はおどろいた。三月はすでに過ぎて、もう四月に入っていたのである。

「ふうん、花見か」

と山川は独り言をいった。それから、とつぜん大きな声を出した。

「よし、行こう」

テレビに写った花見の模様を見て、自分が何かとんでもない忘れ物をしていたような気持ちになったのである。

テレビはダイニングキッチンに置いてあった。本当は他へ置きたかった。子供がテレビばかり見て、真面目に食事をしない。それで、応接間へ移してみたが、そうすると来客中はずんぜん見られないことになる。当然、子供たちから苦情が出て、ふたたびダイニングキッチンへ戻った。そして、食事中はつけないことに決めた。しかし、いつの間にか、それもうやむやになってしまったのである。

テレビに写っている花見は、上野だった。夜桜の下で、男たちが肩を組んで歌ったり踊ったりしている。毎年繰り返される、まことに平凡な絵柄だった。じっさい、去年のフィルムをそのまま写しても、区別はつかないだろう。しかし、そこがいいのだ、と山川は思った。

「明日は、花見だ」

「じゃあ、お弁当にしますか」

と妻の道子がいった。

「お前はどうなんだね」

と山川は、長女の友子にたずねた。しかし返事がない。唇をとがらせて、うつ向いている。

「ま、花見の好きな子供はいないだろうな」

「だって、遊ぶ約束したんだもん」

「遊びって、何だい」

「マー坊たちと、ソフトボールの練習だよ」

「マー坊って、女の子かね」

「そうだよ。お父さん、知ってるはずだよ」

「ハイッの子かね」

「だって、昨日だってうちに遊びに来てたでしよう！」

「あのね、お花見は一年に一回ですよ」

と道子がいった。

「ソフトボールは、またいつでもできるでしょう」

「お前はどうかんだ」

と山川は、長男の泰男にたずねた。

「おれは、どうでもいいよ」

「まあ、そういわないで、たまにはお父さんにつき合ってあげなさい」

「あんなこといってさ、お母さん自分がいきたくないです」

このあとも山川親子の花見問答は、しばらく続いた。主として、妻の道子と長女の友子である。

山川はそれをききながら、昨年までとは反対であることに気づいた。昨年までは、長女は喜んでついて来た。仏頂面は長男の方だったのである。

しかし、仏頂面でも何でも、ついて来さえすればよいのだ、と山川は思った。花見は趣味ではなくて習慣なのだ、と子供たちに思わせたかった。好き嫌いの問題ではない。年に一度の、退屈で平

凡な習慣である。だから、繰り返すべきなのである。

「それじゃあ、こうしよう」

と、山川はいった。

「弁当はなしで、午後から出かけよう。そうすれば、あれだろう。午前中はマー坊たちと遊べし、それから、何か買って食べられるし」

「また、あの川なの？」

「ああ、そうだよ」

山川が、境川の土手の桜を知ったのは、二年前の春だった。最寄りの私鉄電車駅から二十分ばかりのところに、鬼越という駅がある。急行も停らない小さな駅である。境川は、そこからすぐだった。歩いて二、三分である。

境川は小さな川だ。おそらく土地の人以外は知らないだろう。観光案内の類にも、たぶん出ていないと思う。川幅は十メートルくらいだろうか。その底の方を、さして深くもなさそうな水が流れている。水は、ご多聞に洩れず、青黒く濁っている。つまり、何の変哲もない、平凡な無名の川だ。

しかし、土手の桜は見事だった。土手の両側に並木が続いていた。はじめこの桜に気づいたのは、妻の道子である。電車の窓から発見したのだという。山川はそれをきいて、半信半疑だった。彼には少しばかり事大主義的なところがあったのかも知れない。そんな誰も知らない場所に、それほど桜の名所があるはずはない。そう思ったのである。

ところが、行ってみて、おどろいた。そしていまでは、桜といえば境川、ということになってし

まったのである。一昨年は二度出かけた。昨年は三度出かけた。山川には、そういう一面もあるようである。

桜に限らず、頭に固定観念のようなものがあつて、なかなか腰をあげない。しかし、何かの拍子で一旦やりはじめると、今度はそればかり繰り返す。新しい場所を探す気にはなれないらしい。長女の友子が、「また、あの川なの?」というのは、そういうことなのである。

「だって、お母さん何も買ってくれないんだもん」

「そんなことはないだろう」

「だって、不潔だっていうよ」

「そりゃあ、あれだろう、まだ友子が小さかった頃のことだろう」

桜並木の土手には、いろいろな屋台が出ていた。鯛焼き、たこ焼き、いか焼き、鼈甲焼き。そういう物の匂いが立ち込めている。無名とはいえ、近所の人々は境川の土手の桜を知っていて、家族連れで出かけて来るのである。

「ま、子供は、花より団子、だろうな」

と山川は適当にはぐらかした。

「知ってるだろう、花より団子」

「知ってる。いろはかるたでしょう」

「だけどね、これは花見に行つて団子を食べる、ということなんだ。だからついて来れば、何か買つてやるよ」

山川が持ち出した「花より団子」で、友子は、だいたい納得したようである。夕食も終った。

山川は煙草に火をつけた。ふつう山川は、それから一時間ばかり、ダイニングキッチン椅子に坐っている。煙草を吸いながら、ぼんやりテレビを眺めるのである。チャンネルは、ナイターを除いて、だいたい長女にまかせておいた。

最近ではホームドラマに凝り出したらしい。京塚昌子と佐野周二の息子が親子になる、せんべい屋の話。秋吉久美子と阪妻の息子が恋人になる話。男の方は前の妻と別れ、癌だといわれるが、女はその男と結婚する。こういう話は、山川は嫌いだった。悲劇調のものは、だいたい嫌いである。

自分の悲劇嫌いについて、山川は一応の理屈を持っていた。ゴーゴリの喜劇を尊敬している以上、それは当然の話だろう。しかし、長女にゴーゴリを持ち出してもはじまらない。そう思っていて、彼は黙ってテレビを眺めている。テレビをくさすことは、実に簡単なことだ。むしろ、むしろかしいのはほめることだろう。

ただ、長女の見ているホームドラマは、ほめる気になれない。だから黙って見ているが、かといって、見るなという気にもなれなかった。

「じゃあ、どれを見ればいいの？」

ときかれるに決っているからである。そして、どれを見たところで、五十歩百歩なのである。だから、見るなというからには、テレビを捨ててしまふ他はないだろう。そんなことは、もちろんできない。第一に、高校野球である。それからナイターである。大相撲中継である。そして、幾つかの騒物番組である。

山川は、自分の生活がすでにテレビ無しには考えられなくなっていることを、知っていた。日本にテレビというものが出現したのは、山川が大学に入った頃だったと思う。当時テレビは、そば屋

か喫茶店で見ると相場は決っていた。ところが彼の子供たちにしてみれば、生れたときはすでに、日本じゅうの家庭にテレビが普及していたのである。

この二つの世代の違いは大きい。戦争を知っているか知らないかの違いと、同じくらい大きいかも知れない。しかし、不思議なことは、その違いそのものよりも、そういう二つの世代が、こうやって親子として暮しているということだろう。山川にはそんな気がしたのである。

「幸か、不幸か」

と山川は、ついひとり言をいった。

「え？」

と、流しに向っていた妻の道子が振り返った。

「友子、ちょっとテレビ小さくして」

「いや、いいから、いいから」

と山川は、妻と長女の両方に手を振った。

長男の泰男は、いつの間にかダイニングキッチンから姿を消していた。夕食後、五分と席に坐っていない。テレビをほとんど見ないのである。

いつ頃からだろうか、と山川は思った。どうも中学二年生のはじめ頃からのような気がした。ほぼ一年前である。その頃、確か新型のラジオを買った。誕生日のプレゼントに買わされたのである。山川にはさっぱりわからない機械だった。マイクやカセットテープや、その他のものがごちゃごちゃとついている。

それ以来、ラジオに凝り出したらしい。夕食が終ると、さっさと自分の部屋へ入り、ドアを締め

てしまった。何をきいているのかは、わからない。その晩、翻訳で夜なべをしていた山川が、トイレットへ立つと、長男の部屋から若い女の声がきこえた。時刻は午前一時過ぎである。

山川は、ドアの前に立ち止った。若い女の声は、はっきりきこえた。しかし、話の内容はわからない。わかったのは「キミ」という言葉だけである。「キミは」とか「キミの」とかいつている。深夜放送のディスクジョッキーらしい。

山川はラジオはほとんどきかない。テレビのナイト中継が、尻切れとんぼになったときくらいだろう。ただ、深夜のディスクジョッキーなるものが、中学生、高校生、予備校生、大学生たちの間で、たいへんな人気であることは知っていた。特に女性ディスクジョッキーである。

確かに、若い女性ジョッキーの声は、いい声だった。甘く、語りかけるように話している。セクシーであるが、決して濃厚なお色気ではない。なにしろ、きいている方は「キミ」なのである。はあ、これだな、と山川は思った。これが日本じゅうのキミたちの「孤独の友」というヤツだな。しかし、その「孤独の友」のお姉さんから「キミ」「キミ」と呼びかけられながら、長男はいつたい何を考えているのだろう。時刻は午前一時過ぎなのである。

「おい」

と山川は、ドア越しに声をかけた。

「おい、泰男」

と今度は、ドアを二、三度叩いてみたが、返事がない。山川はノブに手をかけて、ドアを引いた。まっ暗である。闇の中で、勉強机の上のデジタル時計の緑色の数字だけが、はっきり見えた。「孤独の友」の声が急に大きくきこえた。声はどうやら、デジタル時計の下の方らしい。

やがて山川は、眠り込んでゐる長男の枕元のあたりに、ラジオを発見することができた。しかし「孤独の友」の声を止めることはできなかった。幾つかのスイッチを押したり、捻ったりしてみたが、結局、止らなかったのである。

翌朝、山川はいつものようにバジャマ姿のまま、ダイニングキッチンへ入って行つた。彼は起き抜けに、コップ一杯の生水を飲む。二日酔のときだけではなかった。大学へ出る日も、休みの日も同じである。この習慣はもうだいぶ前から続いていた。結婚したての頃からではないかと思う。かれこれ、十六年である。

どういう理由で飲みはじめたのか、もう忘れてしまった。山川は酒も飲む。煙草も吸う。酒は、酒豪とか大酒家というタイプではないが、嫌いではない。学生と飲むこともあるし、一人でたまに出かける行きつけの小さな飲み屋も、一、二軒はあった。

煙草は一日にセブンスター一箱である。最近は何冊かで夜なべをしてゐるので、十本くらい余計に吸うようであるが、彼は本数のことは余り気にしていなかった。そういうところは楽家である。自分は肺ガンというものとは無縁の人間だと、勝手に決めてゐるようだった。

しかし、毎朝起き抜けにコップ一杯の生水を飲みはじめたのは、確か酒と煙草のせいだった。つまり、胃のためである。朝、一本目の煙草を吸う前に、一杯の水を胃袋に入れよ。空っぽの胃袋に、いきなり煙草の煙を吸い込むのはよくない。まして、酩酊した翌朝は、なおさらである。

いつか誰かに、山川はそういわれた。十何年か前である。それを山川は忘れてしまつてゐる。ただ、水を飲む習慣だけは、不思議に続いているのだった。冷蔵庫の冷やした水ではない。水道の蛇口を捻つて、コップに水を注ぐ。それを、氷を入れないで、立つたまま飲む。これが山川の、毎朝